

3 歳児すみれぐみ事例

「お店屋さんしたい！」 ― 子どもと環境をつなぐ保育者の姿勢について考える ―

古屋 あゆみ

夏休み明けで園生活が始まったばかりの時期、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、本園では分散保育を実施し、年少児はクラスごとの隔日登園となっていた。こうした状況の中で、好きな遊びを通して生活のペースを取り戻していこうとしている3歳児の事例を通して、子どもと環境とのつながり、それを支える保育者の姿勢について考えてみた。

1. 夏休み明けの「子どもの声から」

9月3日

すみれぐみの子ども達は、1学期中、テーブルやキッチンセットなどをテラスに運んでお家作りをしたり、積み木やジョイントマットをつなげて渡っていくコースを作ったりしながら、自分達で遊びの場を作り、友達と一緒に楽しんできた。

一日おきの登園で始まった9月であったが、子ども達は園が始まったことを喜び、夏休み前と同じようにジョイントマットをつなげたコース作りや室内や園庭で友達と一緒にごっこ遊びを楽しむ姿が見られた。



こうした学期初めの姿から、保育者は「1学期の遊びを繰り返すことでの安心感や、自分(達)で場を作るおもしろさを感じているのではないか」と「子どもの声」を聴き取った。そこで、今、子ども達が求めている楽しさを軸に一人一人が安心し、生活のペースが取り戻せるよう支えていこうと考え、実践事例の当日、以下のようなねらいを設定した。

3期のねらい ひろがる 自分の周りの世界に目を向けていく

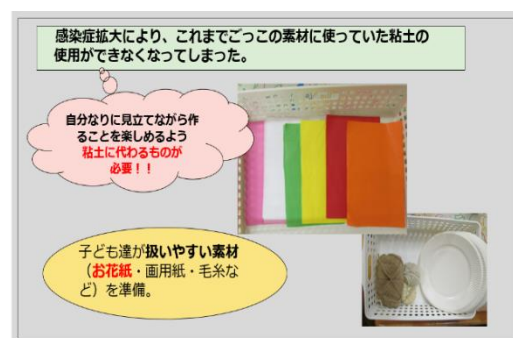
事例当日のねらい 好きな遊びを楽しみながら園生活のペースを取り戻していく

当日は雨で外に出られないことも予想されていた。そこで、子ども達が遊びに求めている楽しさを支えていくために必要な環境を次のように考えた。

- ①子ども達が遊びの場を構成したり、区切ったりできるような素材として、ジョイントマットやウレタン積み木、机や大型のマットを準備しておく。



- ②ごっこやごちそう作りの素材として子どもが扱いやすく、見立てたり、形を変えたりできるものとして、お花紙や画用紙、毛糸などを準備し、提案できるようにしておく。



- ③雨のため室内での遊びが広がることを予想して、空間を広めに確保し、人数が増えても対応できるよう予備の机を準備。



2. 当日の子どもの姿 9月9日

朝から雨のため、子ども達は保育室内で粘土やお絵かきなどで遊び始めていた。bの「お姫様のお城を作ろう」という一言をきっかけに遊びの流れが変わり、子ども達が一気に室内の物をテラスに運び始めた。

初めのうちはお城づくりに参加していたAだが、途中からエプロンをつけ、Cと青いマットを取り合い始めた。Cはすぐに手を離し、別のものを運びに室内に入る。



マットを確保したAは保育者に「お店屋さんしたい」と伝える。これまでクラスでお店屋さんごっこをしたことはなかったため、保育者はAに使いたいものを聞きながら冷蔵庫やテーブルなどを一緒にマットの周りに運んでいった。

この場面から保育者は、この青いマットが「もの」として「自分の場所を作りたい」というAの思いを誘発し、また、身に着けていたエプロンという「もの」はAがお店屋さんになりきるために必要なアイテムであったととらえた。そして、「お店屋さん」として場を囲うことで、Aにとって安心できる「空間」ができていったのではないかと考えた。

初めて「お店屋さんをしたい」というAに保育者は援助の糸口を見つけようと話を聞いていく。保育者が「どんなお店にしたい？」と尋ねると、Aは「食べ物やさんがいい」と言いながらも何を作ろうか決まっていなかったため、保育者が「これで何か作れないかな？」と準備していたお花紙を提案したが、Aは、初めての素材をどう使うのかイメージがわからない様子だった。

そこで「こんなのできるよ」と保育者が目の前でお花紙を丸めて見せると、Aは「お団子やさんにする」と言う。



お花紙

保育者との関わり

この場面では、「もの」としてお花紙という柔らかい素材の扱いやすさと保育者（「人」）の具体的な提示や関わりを通してA君のしたいことが明確になっていったのではないかと捉えた。

他の友達も加わり、お団子作りが始まる。「お店屋さんをしたい」というAの言葉に、当初、保育者は「お客さんとのやり取りを楽しみたいのだろう」と予想したのだが、他の子が作ったお団子をテーブルに並べる中、Aは「お団子はまず冷やして、そして焼くんだ!」と言って、作ったお団子を売りに出すのではなく、冷蔵庫に入れてからレンジで焼くという作業をせさせと繰り返していった。



区切られた空間

後になって動画を振り返る中でこのキッチンや冷蔵庫に囲まれた空間の中で、Aは調理場のような雰囲気を感じながら、本格的なお団子作りを職人のような気分で楽しんでいたのではないか、ということに気がついた。また、このお花紙のお団子は作る工程が目で見てもわかりやすいことから、他の友達がお店に加わるきっかけになったのではないかと考えた。

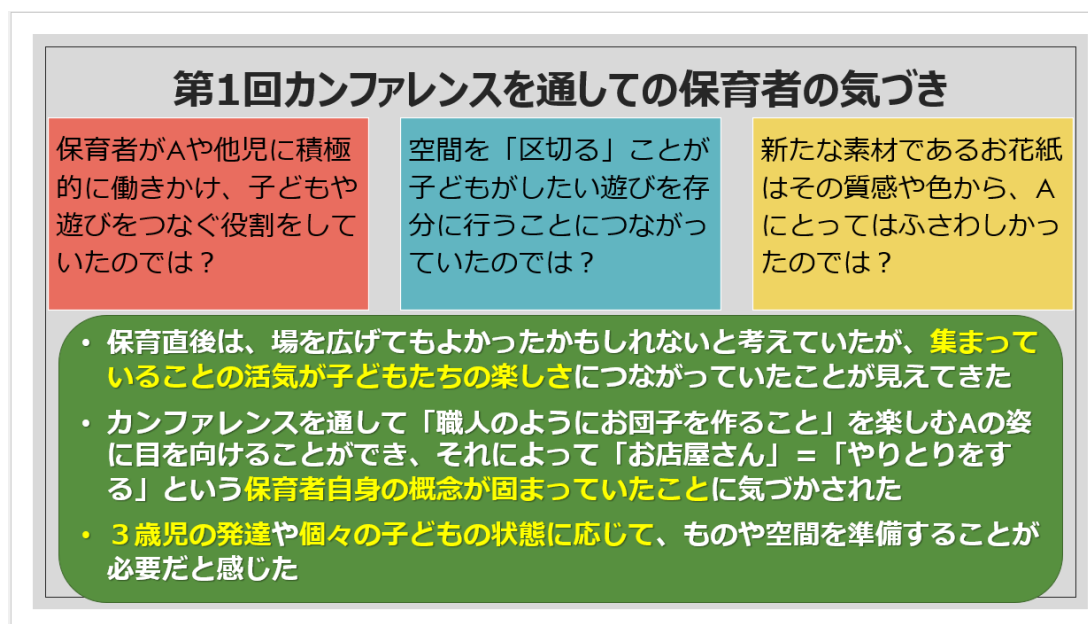
次第に遊びに加わる子が増え、店員になってお団子を売る子やお客さんになる子も出てきた。そんな中、クマのぬいぐるみを連れてきたEが「クマさんがあったかいお団子ほしって!」と注文をする。これまで冷やして焼く動きを続けている「Aの作業を生かせるかもしれない!」と考えた保育者は「あったかいお団子くださ〜い」と店内に呼びかける。Aは「は〜い」と温めたお団子をEに手渡していった。



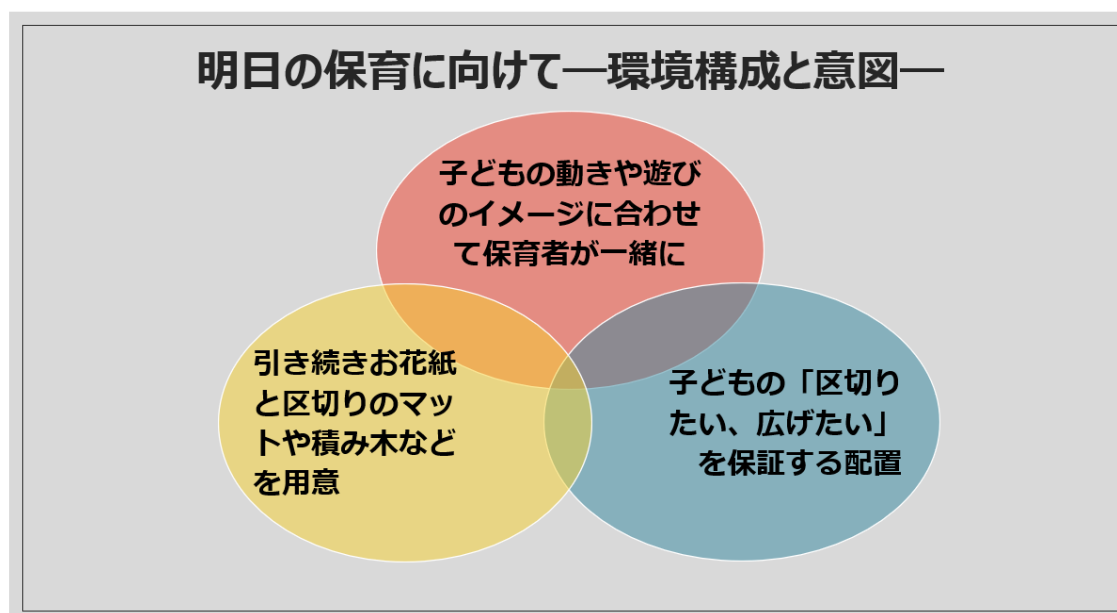
友達との関わり

この日、雨のために保育室前の見通しのよい場所にできたこのお店の空間が子ども達の関心を引き、色々な子に加わる要素になったのでは、ととらえた。

この後の第1回カンファレンスを通して、「人」「空間」「もの」の視点から以下のような気づきを得た。



翌日の保育に向けては、次のような意図のもと、環境を構成していった。



その後の登園日は「お店屋さん」ではなく、保育室の真ん中にものを運んでおうちごっこが始まり、子ども達が作ったお団子のご飯になっていった。また、翌登園日の16日には、テラスでのおうちごっこが広がっていった。いつも使っているもの、友達と一緒に保育室や囲われた空間を使った遊びが展開されていった。



検討事例から1か月後、Aは気の合う友達と一緒に寿司屋さんを始めた。

「なににしますか〜?」

10月22日(木)

Aは、C,Bと「お寿司を作る!」とキッチンカウンターや机を運び、保育室の真ん中でお寿司屋さんを始めた。個人持ちの粘土を使ってマグロやいくらを作り、Aは「なににしますか〜?」と並んだお客に注文を取っている。Cは「並んでお待ちくださ〜い」と声をかけながら、奥でお寿司を握っていた。

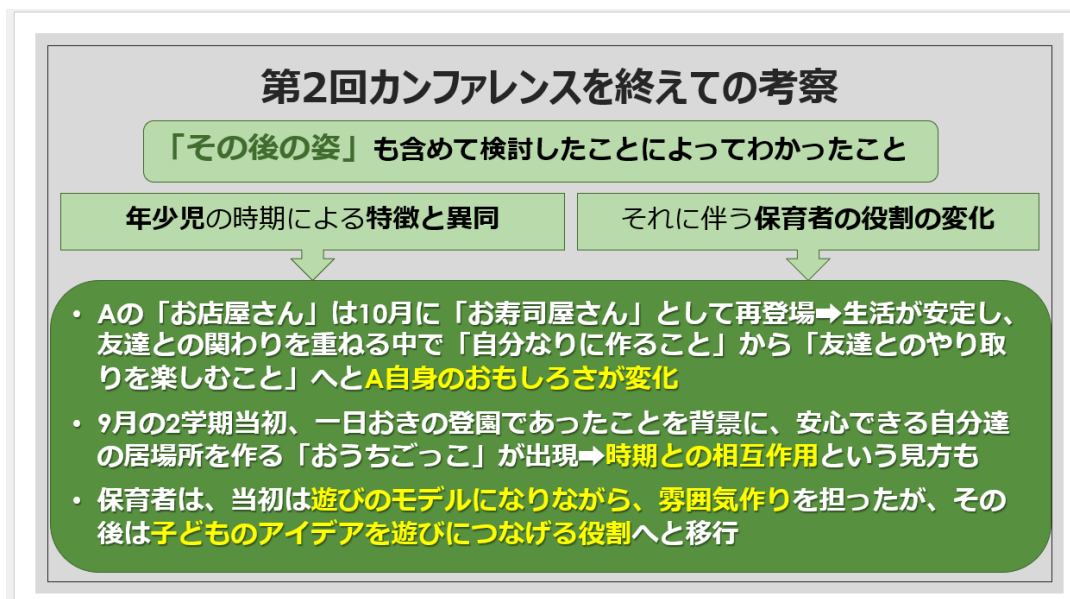
可塑性の高い素材

やりとりの楽しさ

緩やかな区切りの空間

10月の後半、気の合う友達同士でやりたいことを決め、素材を選び、お客さんとして並んだ友達にマグロやイクラをふるまう子ども達の姿が捉えられた。お寿司屋さんになりきって楽しむ姿を頼もしく感じながら、もう遊びのつなぎやモデルとして介入する必要はないと判断した保育者は、列に並んでお客さんとして参加した。

2 回目のカンファレンスにおいて出された意見から、次のようなことを学んだ。



夏休み明けで、しかも一日おきの登園だった2学期初めは、まだ生活が落ち着かない不安や緊張感が子どもの背景にあった。動画撮影日に見られた「お店屋さん」が続くことはなかったが、その後の姿から子ども達は「自分（達）の場をしっかりと囲う」ことや「おうちごっこ」を繰り返すことで「安心感」を求めているのだろう。そのため、保育者は遊びの場を一緒に作ったり、具体的な素材の提案をしたり、また子どもの遊びのモデルになりながら安心して遊べるような雰囲気づくりを心掛けていた。

1か月半近く経過した10月には、カウンターを挟んだ「お寿司屋さん」という緩やかな区切りの空間でごっこ遊びが展開していることから、生活の安定とともに、子ども達にとっての空間の意味合いが変わっていったことが見えてきた。そこから遊びに表れる「子どもの声」には時期との相互作用も影響しているのではないかと考えた。

当初、Aが突然「お店屋さんしたい!」という思いをもった根拠が保育者には理解できていなかったが、後日、記録を振り返った中で、1学期に年長児の「ハンバーガー屋さん」に行った経験が「たべものやさん」としてのAのイメージに結び付いていたのではないかと考えた。たった1回の経験ではあったが、その時の年長児の活気や楽しかった思いが「あんな風にやってみたい」という憧れとともにAの中に残っていたのではないかと考えた。もしかすると、9月の時点で保育者が提示した「もの」としてのお花紙がAの希望とは違っていただけで、扱い方がわからなかったのかもしれないとも考えた。いずれにしても、この時の「お店屋さん」でAが楽しんでいたのは、「自分なりに作ること」であった。それが、気の合う友達と遊びを重ねる中で、自分達で空間を作り、「友達とのやり取りを楽しむこと」へとA自身のおもしろさが変化していったことで、「お寿司屋さん」としての「やりとり」の再現につながったのかもしれないと考えた。